

# 予言する機械とテクノクラシー1)\*

## 安部公房『第四間氷期』論

李先胤\*\*

(e-mail: ozroad@hanmail.net)

---

### 目次

---

1. はじめに
  2. 予言する機械のアンビバレントな意味
  3. 予言機械と出産・保育機械の相関性
  4. 予言の独占とテクノクラシー
  5. おわりに
- 

## 1. はじめに

本研究は安部公房の長編小説『第四間氷期』<sup>1)</sup>に登場する機械の表象を考察するものである。戦後日本における最初の本格的SF長編として発表された本テキストには、1950年代の人工衛星や原爆技術開発をめぐる競争を背景に国際政治・経済のキーワードとして浮上した科学技術と、芸術表現の接点があり、生命史の転換を語る、テクノクラシー批判の物語として現れている。

1950年代初頭から共産党の文化オルグとして活動した安部公房は、戦後にも反復され

---

\* This work was supported by the National Research Foundation of Korea(NRF) Grant funded by the Korean Government (MEST) (NRF-2007-361-AL0015).

\*\* 梨花女子大学校人文科学院HK研究教授、日本近現代文学

\*\*\* 本論文は日本文学協会第29回研究発表大会（平成21年7月19日、於静岡大学）における口頭報告に基づく。

1) 『世界』1958年7月号～1959年3月号、岩波書店。初連載になる1958年7月号には「空想科学小説『第四間氷期』」と明記されている。

る帝国主義的な支配構造を指摘し、特に資本とテクノロジーの結合による支配という問題を、多くのテキストのなかに具体的な設定として取り入れていた。『第四間氷期』で安部公房は、1950年代という時代を背景に、予言をするということの意味を問い、計算により生まれる安易な信念の問題を指摘している。

戦後左翼運動に参加していながらも、その内部の問題について批判の視覚を堅持し、1956年東ヨーロッパの訪問以降社会主義国家内部の矛盾に注目してきた安部公房は、国際政治のシステムのなかで激化した技術開発競争が、社会主義における内部矛盾をもっと難解な問題とさせた<sup>2)</sup>と指摘していた。人間の理性への確信という非論理が予言機械をめぐるエピソードで指摘されている『第四間氷期』は、安部公房のテキストにおける重要モチーフである、身体、機械、暴力という問題が、政治と合体した科学テクノロジーと身体の変形との関わり方に注目して描かれている。

『第四間氷期』を扱っている代表的な先行研究としては新戸雅章、鳥羽耕史、クリストファ・ボルトンなどによるものがある。新戸雅章は予言機械が未来を語るための補助線のような装置であり、ここで重要なのは予言されう未来の内容から見える先見性などではなく、予言が生み出される原理<sup>3)</sup>であると指摘する。鳥羽耕史は冷戦期における遺伝学研究の実像を綿密に検討し、『第四間氷期』が執筆された当時に注目を集めていたソヴェットの科学者ルイセンコの理論に基づいている<sup>4)</sup>ことを明らかにした。ボルトンは、安部が戦後日本における最初の本格的SF長編として発表された『第四間氷期』で自然災害を素材にして日本のローカル化したナショナル・アイデンティティーを問うていると評価している。<sup>5)</sup>

2) 埴谷雄高は科学の軍事的な意味が強調されるに連れて政治と科学の癒着が深化するとの見解を述べた。“人工衛星は大陸弾道弾と同じ基礎にあるというわけです。こういうふうには軍事が強調されると、ピラミッド建設時代のエジプトと同じようになる。要するに秘密というものが第一の聖なる秘儀となり、古代のファラオと僧侶が一体化したごとく、政治指導者と科学者が第一段階と第二段階として合体して、その神権時代には人民は秘密にあずかりえないという段階が続かざるを得ない、そして、他方、必然的に社会主義社会権においても優越国家と劣敗国家ができる。”安部公房はこれに対し、“東ヨーロッパとソヴェットの矛盾、そうしたものから人工衛星ができたにもかかわらず残っている、というより、むしろああいう矛盾を内側に含んでいることが、逆に結果として、人工衛星を可能にしたんじゃないか、四十兆億円ですか、そういう巨大な金をかければ、ソヴェットないしは共産権の諸矛盾を内部だけで解決しようとするれば解決しえたはずである。”“内部矛盾として耐えなければならないような国際矛盾があったから、急速に人工衛星を具体的に飛ばすという結果にゆきついた。おそらくこの矛盾がなかったならば、人工衛星が飛ぶまでまだ四、五十年かかったかもしれない。そういうことと、人工衛星が飛んだということは、一つじゃないかと思えます。”と発言している。

「科学から空想へ——人工衛星・人間・芸術」[座談会] 武田泰淳、埴谷雄高、荒正人、安部公房、(1958)『世界』「技術と人間の体制 人工衛星以後の展望」1月号、初出。

本文の引用は安部公房(1998)『安部公房全集008』新潮社、190～211頁)

3) 新戸雅章(1994)「『第四間氷期』と未来の終わり」『ユリカ』8月号、112～117頁

4) 鳥羽耕史(1997)「安部公房『第四間氷期』-水の中の革命-」(『日本文学研究』、早稲田大学、106～116頁

『第四間氷期』は予言機械を中心軸にして構成されており、人間の身体を利用し再生産を行なう出産・保育機械が、機械による予言を具現していく過程で重要な役割を担当する。前述した先行研究はそれぞれの視覚から『第四間氷期』に描かれている技術的側面を論じているが、機械の表象に主眼をおいているわけではなく、予言する機械と出産保育機械の連関をも言及していない。本論文では『第四間氷期』に描かれている二つの機械である、予言する機械と、出産・保育機械に本テキストの構造的・美学的中心軸があるという観点から、二つの機械の表象を分析し、その相関図を描こうと試みる。

## 2. 予言する機械のアンビバレントな意味

本稿では先ず『第四間氷期』というテキストを構造的に支えている二つの機械のなかで、機械が予言をするという事態の意味分析から始める。次に機械の予言が見せる未来の青写真を先に手に入れたテクノクラートたちが、生き延びることと権力の維持のための核心的道具として使用している、出産・保育機械という表象を、予言機械との関係性を中心に分析する。二つの機械の関係が一種のパートナーシップであること、それを駆使してテクノクラートたちが存続・拡張させようとしていたものは、その主人公である勝見博士の死に焦点を合わせることで、あるシステムであったということが、確認されるのであろう。

『第四間氷期』は、序曲、プログラム・カードNo・1(1~22)、No・2(23~34)、間奏曲、ブループリント(35~38)で構成されている。物語の中心装置ともいえる予言機械のKEIGI-1は、地球温暖化で続いていた海水面の上昇で第四間氷期が終わり、陸棲人類は終末を迎えるという未来の予言を語り始める。このように、機械が予言をするという事態は果たして何を意味するコードなのだろうか。

『第四間氷期』の主人公である勝見博士はプログラミングの専門家で中央計算技術研究所に勤めていた。プログラム・カード No・1は次のような文章で始まる。“電子計算機は、考える機械のことである。機械は考えることは出来るが、しかし問題をつくりだすことはできない。機械に考えさせるためには”、“機械の言葉で書かれた質問表をあたえてやらなければならないのである。”この引用文は、予言機械に対する基本概念を表しながら、その機械的計算を現実的なものにするには人間の主体的な問題意識が必要であるということを描いている。機械の計算能力を拡張させた結果、ソ連は最初の予言機械、モスクワ

<sup>5)</sup> Bolton, Christopher(2007) *Robot Ghosts and Wired Dreams*, p.7

1号を発明する。これに対し勝見博士は、ある新聞の記事で“大体電子計算機というものは、もともとある種の予言能力はもっているものなんだ。問題は、機械そのものよりも、それを使いこなす技術”で、“機械に分る言葉で問題をつくってやる仕事だがこれがむづかしい。今までの機械では、どうしても人間がやらなければならなかったんだ。しかしモスクワ1号というやつは、このプログラミングを、どうやらかなりの段階まで自分でやれる機械らしい”とコメントする。同じ新聞にはある小説家による次のような意見が載っていた。“自由を失った共産主義者なら、機械に予言されてしまうくらいの未来しか、持てないのかもしれない。しかし、未来を自由意志でつくりだすわれわれには、おそらくなんの役にも立たないだろう。”この小説家と“同意見のもの”とされた勝見は、内心この予言機械の開発を熱望していたので、“ならんで載った小説家の言葉には迷惑させられたものである”<sup>6)</sup>と思っている。

『第四間氷期』は1964年に改稿されており、プログラム・カードNo. 1の最初の文章には“すべてを必然の型にはめこんでしまうとする共産主義者なら”という表現が目立つ。<sup>7)</sup> 1961年共産党除名という事態を挟んだ二つの原稿から見えてくるのは、鳥羽耕史が指摘しているよう、1959年の時点で安部公房は共産主義自体を否定しておらず、ここで問題にされているのは共産主義ではなく日本における革命のあり方<sup>8)</sup>であるが、計算＝予言によりある種の理想的な未来を簡単に確信してしまう思考方式を批判する表現についての工夫の痕跡は、日本共産党と社会主義国家内部における矛盾という問題意識を明確なものにしていると言えよう。

安部公房は、勝見博士と小説家によるコメントを通して、未来を予言するということに対する基本的観点を提示している。勝見博士は、機械の運用における人間の主体性、自由意志を強調しながらも、結局はモスクワ1号の能力を認め、自分の予言機械の開発への支援を求める方に立っている。予言機械を開発する科学者として欲望が、勝見博士の、機械の予言に対する二重的な意識を発生させているのである。これに対し、この小説の書き手を思い浮かばせるある小説家という人物は、予言の可能性に否定的な視覚を表し、モスクワ1号の予言能力自体を確信することに対する、またその運用上の問題に対する、疑問を抱いている。そして予言の信仰が道徳心を麻痺させることを恐れているという小説家のコメントそれ自体が、このテキストの中で、一種の予言のように機能することになる。

6) 『安部公房全集009』(1998)、以下『009』、13～14頁

7) 1959年3月に雑誌『世界』で連載が終わり、1959年7月5日に講談社から『第四間氷期』の初刊本が刊行され、この時テキストは全面的に改稿されている。再刊本は1964年に早川書房から出版されたハヤカワSFシリーズ3062『第四間氷期』で、初刊本に加筆改稿されている。

8) 鳥羽耕史(1997)「安部公房『第四間氷期』-水の中の革命-」、106～116頁

ここでは、1990年代の湾岸戦争以降に進んでしまったあらゆる国家・社会システムがコンピューターの管理下に入り、それが自明でありながらも不問に付されている問題が原理的に問われていると見える。システムのなかで消し去られるものが何かを見つめる視線からこの物語は構築されている。

予言する機械とは、数値化したデータをあるプログラムに入力し、答え＝予言を算出する、電子計算機＝コンピューター・システムの基本的仕組みを意味している。数学的計算や自然科学的問題だけでなく、社会と政治に関わる事案までもこのような予言の過程では導出することができる。このような予言をめぐる想像力の射程には、冷戦期という同時代的背景から、ソ連などの社会主義国家による計画経済の方式が意識されていると考えられる。

言語の問題に常に意識的でありつづけた安部公房は、日本で電子式コンピューターの開発が本格的に進められていた1950年代後半<sup>9)</sup>に書かれたこのテキストで、“機械に分る言葉で問題をつくってやる仕事”をする人間を、“プログラミングをある段階まで自分でやれる機械”と対置させている。“プログラミングとは、要するに、質的現実を、量的現実に戻元してやる操作のことである。”という表現は、コンピューター言語の原理を表わしている。科学的計算により計画通りの結果が得られるという確信は、当時社会主義国家の経済政策の例で見ることができる。データを入力し、プログラムを作動させ、来るべき未来像という結果を産出することの難解さは、その計画のなかで調節されにくい変数——社会主義計画経済の例では労働力の再生産や食糧などの問題、環境の問題などが存在したからであったと言えよう。

『第四間氷期』ではこの変数の部分を科学テクノロジーによりコントロールしようとするプログラムが始動するが、それが次章で述べる出産・保育機械である。

### 3. 予言機械と出産・保育機械の相関性

身体の機械化というテーマは、安部公房が執筆したSF的テキストに遍在しており、特に1950年代のテキストを解釈する核心的な要素の一つである。機械化する身体を持ち主は

<sup>9)</sup> 日本最初のデジタル式自動計算機ETL Mark (1952二年、Mark IIは1955年)、実用リレー式自動計算機の最初であるFACOM 100(富士通信機、1954年)、日本最初の電子計算機と呼ばれるFUJIC (富士写真フイルム、1956年)などが完成して以来、1958、9年頃には東大、日本電気、東北大、日立、東芝なども研究を進め、電子計算機の開発競争が活発になっていった。

マイナーな存在たちであり、『飢餓同盟』<sup>10)</sup>に登場する頼木の人間メーター化、「R26号の発明」(1953)における元技術者、高木のロボット化などでその例が見られる。

作られた機械は身体の痕跡を拡張し、肯定的・否定的な意味両方で補助器官的である。『第四間氷期』の二つの重心的機械は、身体器官の機能の拡張と密接な関係にあり、機械の頭脳を生み出した科学技術者と経済権力の連合は、環境の変化にも耐えられる新しい労働力を確保するため、出産・保育機械という、身体より効率的な収奪方法を考案する。この機械による身体の変形が他のテキストと異なる、ある性格を示していることに注目する必要がある。ここで描かれている機械による変形は、安部公房のテキストで多く見られる個体的身体における突発的な変形<sup>11)</sup>ではなく、遺伝可能な種の変異として扱われているのである。

このテキストの中では、再生産の問題—人口問題や自然問題—食糧難や温暖化が、非常に早い段階で問題化されている。前章で述べたように、計画経済の問題として指摘された点は、工業や農業などの数値を計算し、それから出される結果から未来社会の予想は果たして可能なのかという問題であった。ここでソ連と中国の計画経済を停滞化させた重要要因の一つである市場化できない再生産の問題が浮かび上がってくる。

マルクスは『資本論』で“労働力の所有者は死を免れない。したがって貨幣の連続的な転化は、労働者が市場に連続的に現れるために、労働力の売り手が……生殖によって永久化されねばならないという前提に拠っている。消耗と死によって市場から引き上げられる労働力は、少なくとも見積もっても同数の新たな労働力によって絶えず補填されねばならない。したがって労働力の生産に必要な生活手段の総額は、補充人員すなわち労働者の子供の生活手段を含んでおり、こうして、この独特の商品所持者という種族が商品市場で永久化される”と指摘している。(Marx, *Das Kapital*)<sup>12)</sup>マルクスやネグリ&ハート、宇野弘蔵を読み直し資本について分析する経済学者長原豊は、マルクスのこのような指摘を引用しながら、資本蓄積と強制的な異性愛制との関係を論じた。<sup>13)</sup>

KEIGI—1が提示した未来像は、地球の温暖化と海底の地殻変動による海面の急激な上昇で、人類の陸上生活空間が激減し、結局、地上の文明は滅亡するだろうということ

10) 『飢餓同盟』は1954年2月に講談社から書き下し長編小説として刊行。1970年5月に改稿後再刊。

11) 「デンドロカリヤ」のコモン君の植物化、「壁—S・カルマ氏の犯罪」でカルマ氏が壁になる場面などは、種の変異とは関係のない、個人の身体の変形として描かれている。

12) 長原豊の論文から再引用。

13) 長原豊(2002)「Un/Le Pas Encore—de la Marx—資本制と強制的な異性愛制についての試論—」、「文学」、第3巻第1号 174～188頁、2号243～256頁

であった。このような情報を先に手に入れた財界は科学研究者たちを集めて研究所を設立し、水棲<sup>14)</sup>動物や水棲人間の開発に着手する。資本は自らの存続のため“消耗と死によって市場から引き上げられる労働力”を“新たな労働力によって絶えず補填されねばならない”し、『第四間氷期』の場合のようにその人類の身体が生存を続けられない環境に置かれた時、この資本たるものはその環境条件を変えるよりコストの低い、人体の改造を選択するわけである。

長原豊によると、資本の究極的な目標は一切の外部なしの、内的な論理に基づく自動運動である。これは、外部から収奪し外部を内部に取り込むという、古典的マルクス主義理論から出発したものと見えるが、資本とその外部との関係というのはもはや昔のように画然として分けられるものではなく、資本は外部なしの完全な自動運動を目指しながら、自らの自動運動を可能にする否定的契機として、内部化された外部—労働、生殖、第三世界など—を必要としている。これらの外的な要素はそれ自体が排除され不可視化されることで、内部化される。資本がその存続のためにその捏造を必要とする外部の中で、特に生殖による再生産という問題は、強制的な異性愛制により支えられている。

再生産をめぐる問題は現在の諸国家でも計画や統制などの難しい問題であるが、社会主義の計画経済の場合にも、その失敗の主たる原因の一つであった。生殖と保育による再生産が労働力の安定的な供給による資本増殖の基本条件であることは確かであるが、その危機への対応策は容易に見つからず、出産制限、もしくは、その反対の出産の奨励や公的教育といった形で行われていた。機械の計算による予言が簡単なことではないように、人間の保育には機械化されにくい難点——親になるという選択、子供を育てるにあたって必要な愛情というものは市場化されにくい——が存在する。

KEIGI—1より予測される未来像を現実の中で実現させるために開発されるもう一つの機械が、KEIGI—1の異性愛的パートナーとでも言える出産・保育機械であるということは、資本増殖の構造から見て自明な帰結になる。海底研究所で開発された出産・保育機械は、人工妊娠中絶手術された胎児を買取し、それを原料として遺伝可能な人工的なを作る研究を行っていた。一番、コストにおける効率の高い人体がこのようなミュータント—水棲人間の生産原料として選ばれたのである。動物の場合にもその身体から水棲動物が開発され、秘密裏に海底に建設された海底牧場で飼育され、売買が始まっていた。

この機械を利用し運営されている海底研究所・海底牧場は、財界により考案された再生産・生産の装置である。このシステムは商品の資源になるものを生産する新しい人工植

<sup>14)</sup> 水棲(水生、aquatic)動物とは水域に生息する動物の総称。

民地でありながら、第四間氷期が終わり、陸上生活が不可能になった時に、新しい労働力を提供するための機械なのである。“昔のように、けっこう商売をさせてもらえる後進国もなくなってしまったんだし、それに、ともかく、戦争よりは確実な投資”になるのである。

研究所は築地から晴海をぬけて、12号埋立地に入る橋を渡ったところにあった。

“べたつく潮風の中に、ヨロイ橋が緑色に輝いて見えた。押しつぶされた風景のなかで、このきわだった照明には、なにやら不安をそそるものがあった。橋を渡りきった瞬間に、どこかで低く短い汽笛の音がした。午前零時を告げる合図らしかった。”<sup>15)</sup>

汽笛の音を信号に、道端に止まっていた箱型の車が勝見博士たちを海底研究所・海底牧場へと運ぶ。彼らは、第四間氷期の終末をもたらす大洪水を乗り切るために考案された箱舟の手立てを目撃する。

“驚くべき光景だった。まるで立体的な水族館、汚れた氷塊の積木細工のようだった。大小の水槽が複雑に組み合わせられ、そのあいだを、パイプやバルブやメーターの類が埋めている。人間が通ったり仕事をするための鉄のブリッジが、多いところは三重にもなっている。人間が通ったり仕事をするための鉄のブリッジが、多いところは三重にもなっている。人間が通ったり仕事をするための鉄のブリッジが、多いところは三重にもなっている。人間が通ったり仕事をするための鉄のブリッジが、多いところは三重にもなっている。”<sup>16)</sup>

海の側に建てられた研究所はそれ自体が一つの船のような形象をしている。そして案内された発生室で目にする、水棲ネズミ、ウサギ、牛などは、海底研究所・海底牧場という箱舟の基地で、人工の胎盤と産道、保育機械により、乗船の準備をさせられていた動物たちであった。

出産・保育機械の運営をめぐる描写は、第四間氷期の人類が海水面の上昇のなかで死滅していくという終末的イメージとは対照的な位置から、発生の問題が注目されている。人間を含む地上の動物が、発生之源としての水のなかで、第二の誕生即ち水棲動物への種の変異を遂げる過程の描写では、個体発生が系統発生の過程を繰り返すという生物学の想像力が、羊水のなかの胎児の形象と水棲人類への進化という新しい想像力へと繋がっていく。

そして、第四間氷期を乗り切って新しい時代に生き残るための資格として、人間にも新しい形の身体が要求されることとなる。勝見博士は自分の妻が中絶手術を受けさせられ、子供が保育機械のなかで育てられていることを知らされる。“メダカのような形をした胎児。かげろうのように揺らいで見える透明な心臓。暗い寒天様の物質のなかに線香花火のように散ってみえる血管”を持つ息子は、勝見とは違う身体構造を持つ水棲人間として、前述した

15) 『009』、87頁

16) 『009』、88頁



研究所のなかで育てられている。勝見は自然論理による父—子の存在だけを主張していたが、彼の第二の意識であるといえる予言機械は、父であり続ける第二の方法を模索していたことになる。

勝見博士は予言機械が告ぐ未来を素直に受け入れ、未来のための生殖機能を遂行することができなかった。第四間氷期が終末を迎えた後、人類が水棲人間として身体構造を変えて生き延びるといふ、二つの異性愛的機械のペアによる未来像を受け入れられなかったため、勝見博士は結局死を迎え、テキストから消去される。

この物語の中心軸である予言機械、そして、出産・保育機械は男性と女性の慣習的な性的役割を遂行する。慣習的でステレオタイプ的なジェンダー性が二つの機械を代弁しているともいえる。論理的な頭脳を持つ父性的予言機械と、感性的で肉体的な母性の形象を出産保育機械が担当するといった構図が描かれているのである。

## 4. 予言の独占とテクノラシー

本テキストにおける第四間氷期終末説によると、海底の火山の活性化や異常高温の問題などの原因はエネルギー消費の増大による炭酸ガスの増加などで、第四氷期の名残である氷河も溶けて海面が上昇し第四間氷期は終了する。この情報を入手した各国の政府は対策がたつまでは国民に公表しない方針を立て、政府筋には絶えず移動があるので信用していただけないと、財界から一種の対策委員会を持ち、これが後に海底植民地開発協会まで発展したのであった。

最終章では、1枚のプログラム・カードが機械に入れられ、未来の青写真が提示される。

死にたえた、五〇〇〇メートルの深海で、退化した獣毛のようにけばだち、穴だらけになった厚い泥の平原が、とつぜんめくりあがった。と見るまに、くだけちって、暗い雲にかわり、わきたって、透明な黒い壁を群がって流れるプランクトンの星々をかきけしていった。

ひびだらけの岩板がむきだしになった。それから暗褐色に光る飴上のかたまりが、おびただしい気泡をはきだしながらあふれだし、数キロメートルにわたって古松の根のような枝を広げた。噴出物がさらに量をまし、その暗く輝くマグマも姿をけした。あとはただ、巨大な蒸気の柱が、をつらぬいて渦まきふくれあがり、くだけながら、音もなくのぼってゆく。だがその柱

も、海面にとどくはるか手前でぼう大な水の分子のあいだに、いつかまぎれこんでしまっていた。

ちょうどそのころ、二カイりばかり先を、南米航路の貨客船「南潮丸」が横浜にむかって航行中だったが、船客も乗組員も、ときならぬ船体の振動ときしみに、一時わずかなとまどいを感じただけだった。(省略)

しかし、そのとき、すでに目には見えない海水の振動が、やがて大津波になろうとして、信じがたいほどの波長と時速七二〇キロの速度で、海中を陸地に向かって走りつづけていたのである……17)

このような描写は不気味な未来の始まり、第四間氷期の終末の到来というこの物語を象徴的に表している。最初の段落では、海底から始まった地殻変動が地上に、そして宇宙にまで上昇し、拡張する大転換の力を感じさせる部分である。しかし、地球全体に及ぶ危機感とは対照的に、ここにはテクノクラート集団を乗せた貨客船南潮丸の、悠々と航海を続ける姿が描かれている。上述した引用は、圧縮度の高い莫大なエネルギーを感じさせる。大陸の隆起の描写場面は、核兵器などテクノサイエンスの弊害により登場する怪獣の姿を連想させる。ビキニ沖での死の灰を浴びた第五福竜丸<sup>18)</sup>とは対極的な位置に、南潮丸は存在し、現代の新権力として浮上したテクノサイエンスの情報力と既存権力の結合が、南潮丸を新ノアの方舟化する。船を利用し危機からの脱出を試みる集団の描写は、「洪水」(1950)、「ノアの方舟」(1952)、『榎本武揚』(1964～1965)、『方舟さくら丸』(1984)のような安部公房の他の小説でも多く扱われており、そこには時代の転換期における暴力の問題、裁きの不合理性の問題が指摘されているといえる。

テクノクラシーは専門的な知識や科学、技術により社会、経済を管理、運営、操作し、これを所有するものの議事決定に対する強力な影響力を持つシステムのことである。安部公房は近代以降、特に冷戦期に浮上しはじめた新しい権力階級としてテクノクラートを注目した。

19世紀のサン・シモンの思想に基づき、20世紀初頭には技術者革命というヴェブレンの発想に代表されるテクノクラシー論は、ニューディール政策やナチ体制をはじめ、全体主義

17) 『009』、10頁、164頁

18) 1954年3月1日、南太平洋ビキニ環礁でアメリカが水爆実験を行い、同環礁東方160キロの海上で操業中の日本のマグロ漁船第五福竜丸が水爆による「死の灰」を浴びた事件。乗組員23名が「急性放射能症」と診断され、5月には日本各地に放射能雨が降り始めた。この事件は世間に強い衝撃を与え、核兵器禁止の世論が盛り上がり、翌55年の8月に広島で第1回原水爆禁止世界大会が開催される。

の道具化という別個の意味を持って展開した。また、テクノクラシーは戦後現代社会の構造的特質を指示する概念として展開されている。

『第四間氷期』が書かれた時期の首相であった岸信介は、商工省の官僚出身で満州国を計画経済の実験場にした。戦時下の総動員体制をバックアップする経済計画を主導し戦犯となった岸信介が、戦後また復帰し1957年には戦術核武器の使用は違憲ではないと発言する。現在北朝鮮の核実験報道による緊張感が高まっているが、岸信介からつらなる日本の核武装論の基底には、核武装による科学軍事技術の既存の政治軍事大国と対等な位置で独立を果たしたいという欲望があった。

科学技術開発と国家権力の合体が、国家間競争の形で暴力の勝利のための物質的手段として機能してきている構図が可視化してきた1950年代を俯瞰した安部公房は、それまでの文体と科学的モチーフを強化した本格SF小説という形を取り、人間の身体に対する暴力的操作までに至るテクノクラシーの叙事詩を執筆したのであろう。

## 5. おわりに

自然的知覚や認識内容は、プラトンが宇宙の材料・無秩序な状態を指した生成(genesis)、カントの物自体のようなものを存在論的な根拠として成立する。自然的に知覚される現実空間が仮想空間に編入されるとそれはデジタル的言語体系として成立し、今まで人間の手の届かないところにあったものが、人間により掌握される。しかし、そのデジタル符合のシステムが人間の身体を攻撃するというアイロニーが待ち受けている。デジタル的言語体系の、脱人間的で、自ら学習を遂行するインターフェースの原理上、人間の身体ではコントロールできない領域を構築しているからである。<sup>19)</sup>

本稿はテキストにおける二つの機械の表象に着目し、執筆当時の新しいテクノロジーとして注目され始めたコンピューターによる計算と、その計算による予言が可能になるという事態が持つ政治的意味を分析した。社会主義諸国における計画経済を、失敗した予言の代表的な例として考える場合、そこには計算されにくいファクターとしての再生産の問題があったと言える。資本の存続/増殖のためには強制的異性愛制が要求される。本テキストにおける資本勢力はテクノクラートたちと結合し、再生産のファクターをも掌握するために人間の身体を水棲動物化していく。その計画が現実形象化した形が妊娠・出産機械のシステム

19) 조광제(2005) 『메체철학의 이해』, 도서출판 인간사랑, p. 173~208

の表象である。そして勝見博士が予言の情報を先に取得することの出来たテクノクラートであったにもかかわらず、予言機械と妊娠・出産機械の慣習的異性愛制的パートナーシップを否定し、除去されるのは、資本システムの論理によるものであることを本論文では明確にした。

ソ連の人工衛星の発射などによる冷戦期の緊張が高まった時期、安部公房は、コンピューターに代表される科学テクノロジーの問題が、人間の意志が黙殺される形で進まれていく様子を『第四間氷期』というテキストに具現した。資本と結託するテクノクラシーが、人間の身体への支配と密接な関連を持つという安部公房の問題意識は、ダイナミックな身体の変形の描写により鮮明な印象を与えながら展開される。が、この変形が他の安部公房のテキストで多く見られる個体的身体における突発的なものではなく、各生物種の発生段階における情報を操作した結果としての、遺伝可能な種の変異を扱っているということが、人間の身体の変形を扱った安部公房の他の創作テキストとの決定的差異点であるだろう。

安部公房は特有の科学的目と感受性で人間の身体を管理する政治を眺めた。異形のものに直面した瞬間の、ためらいを現実へと向かわせようとしてきた安部公房の作業は、コントロールのプログラムと、そこからはみ出し排除されてしまうものを描く。システムは自動的に、わからないところは変形したり省略したりし、来たるべき未来を拒否するものは、事後的基準により未来から裁かれ除去されてしまう。人間の身体ではコントロールできない領域を構築しているデジタル的言語体系の拡張が増殖し続けている現在、言語化というコンピューター・システムの原点から、人間の身体と歴史の転換を総合的に考えた安部公房の思考は再評価されるべき時点に来ているのではないだろうか。

## 【参考文献】

- 조광제(2005) 『매체철학의 이해』, 도서출판 인간사랑, 173 ~212쪽
- 安部公房(1998) 『安部公房全集008』新潮社、190~211頁
- 安部公房(1998) 『安部公房全集009』新潮社、10、87~88、164頁
- 新戸雅章(1994) 「『第四間氷期』と未来の終わり」 『ユリイカ』8月号、青戸社、112~117頁
- 助川 徳是(1971) 「第四間氷期」 (70年代の前衛・安部公房(特集)) 『国文学解釈と鑑賞』 36(1)、1月号、96~100頁
- 鳥羽耕史(1997) 「安部公房『第四間氷期』——水のなかの革命——」 『国文学研究』、早稲田大学国文学会編、106~116頁
- 長原豊(2002) 「Un/Le Pas Encore—de la Marx—資本制と強制的異性愛制についての試論—」、 『文学』、岩波書店、第3巻第1号 174~188頁、2号243~256頁
- Bolton, Christopher(2007) “Robot Ghosts and Wired Dreams” : University of Minnesota Press. p.7

## 要 旨

『第四間氷期』は、国家的政治決定過程に参加し、新しい支配権力として浮上する高級技術者及び経済官僚が、二つの機械に象徴される科学テクノロジーという手段を通して、異種混交的な、境界を越える人間の身体を管理していく様子を描いている。

本稿は 予言機械、出産・保育機械という二つの機械の表象に着目し、当時新しいテクノロジーとして注目され始めたコンピューターによる計算と、その計算による予言が可能になるといふ事態が持つ政治的意味を分析した。

社会主義諸国における計画経済を失敗した予言の代表的な例として考えると、そこには計算されにくいファクターである再生産の問題がある。資本の存続のためには労働力の再生産のために強制的異性愛制が要求される。本テキストにおける資本勢力はテクノクラートたちと結合し再生産のファクターをも掌握しようとする。そのため、彼らは人間を含めた動物の身体を水棲動物化していく。この過程で論理的な父性としての予言機械がテクノクラートの操縦で稼動し、この計画を現実化される母体の形象化が出産・保育機械のシステムの表象である。

予言の情報を先に取得するテクノクラートでありながらも、予言機械と出産・保育機械の慣習的異性愛制的パートナーシップを否定した勝見博士がテキストの結末部で除去されてしまうのは、このような資本システムの論理によるものであるということをこの論文は明確にしている。

キーワード：予言機械、出産・保育機械、再生産、テクノクラート、種の変異、  
冷戦、プログラミング、水棲動物

투 고 : 2012. 11. 30  
1차 심사 : 2012. 12. 15  
2차 심사 : 2013. 1. 5